

特別
子12
3643
50







故
梅若誠太郎氏
昭和元年正月廿日
梅若重戶氏
寄贈

前々太平記卷之十九

廿五紙

紫式部が源氏物語之事ヲ云ヌル也

書ヲ見ル事其一部ノ要ヲ心ニ掛テコソ作者心モ骨ヲ折タル甲斐

アルベケレ只徒ニ此物語ヲ優艶花麗ノ書ト思ヒ無常寂滅ノ理

ト觀ズル愚也トヤ定ベキ儲コソ石山ノ觀音ノ十八神カラ假子

トモ式部が才覺一ツ書出マゼキモノモ非已ガ度量狭クニ

式部が自カニ非ト思ハ井中ノ蛙ガ天ノ廣キ疑類ナルテ折

角カヲ盡タル作者ノ功ヲモ徒ニナス其罪甚深カルベシ左様ノ人ヲ

出ヤラヌ則夫コソ火宅ノ門

前々太平記卷之十九終

満壽云ッ右ノ如ク書留ル文法アル事ニヤ野宮謡ノ終リ結文ヲバ
火宅ノ門ト留テ恐ラバ右太平記ノ文ヲ採テ作シタリト覺ユ往テ
識者ノ門ヲ抑 尤亂舞道ニ火宅留トテ習トスル所也

○是より下滿壽が愚考を記す

「こそら」 「こゆき」 「こふゆ」 「こやま」 「こたに」 「こゆ」
空 雪 冬 山 谷 温泉

此等此之文字ハ意味無シ言葉此飾ノコ
但シ 宋女謡ニ云 程なくかやたこ山となほ文 是ハ太山ノ字なるべ

「わしこやま」 「わしあやま」 「かすがれあやま」 「いばあやま」
此等ハ清ノ字たるべ 音樂乃

「こそこの竹」 「こかはの水」

此等ハ清園清溝ノ字ナレバ清ノ字勿論也

「養老」
年を預ーこは、おやま乃松陰也

此お山のお字意不解

但シこ山こ谷ノ類歟

○さいといふ言が源^{もじ}よて

てにをは、ハ也

「さハ

○さい者まで
○さいなくて
○さいさりなごう

「さぞ

同

無、字を宛^{あて}り

「さこそ

同

「さも

同

諾、字を宛^{あて}り

「さりも

同

志、測公相がた今、屋集、お聴ニ云ッ
―も、ハ、多キ、おの中にていと、おを、さう、こけて、次く、云入る言也、ト

「さて

○さあるにて、中畧にて、約^{つまり}も也

依てから國、此、空、書に、さて、ト、フ、字の無キハ、道理也

さてハ
さてモ共

叔、備、等、此、字を、宛^{あて}り

小説ニ云、却説、さて、ト、よ、す、せ、り

又

○さいといふ下^{くだ}にてにをは、ラ、付^つび^びて、尅^{はら}す

詞乃まなへうつるハ

眞、字

「さほど樂^{らく}む國なごう

「さやうに詠^{えい}め

「さまでハ、ちりひべき

「さながる秋の、海、芽、原

采、心、比、皆、字、ヲ

「さむかりを、たつかり

「さなきだに、人心

無

宛^{あて}り

「さのこちを、争ひ、はひそ

切、字を、宛^{あて}り

○それのこ、このこ、侍のこ、う
○差のこ、は、る、○今、下、の、こ、を

此、等、此、類、也

○ さといふ言よりらりるれ、假字に續くハ

「さしバ」 さあしバ約也 「さしごも」 さあしごも

「さるいごも」 さあるいごも 「さるほとに」 さあるほと

「さる間」 さある間 「さりごてハ」 さありごて

「さりごも」 さありごも 「さりながら」 さありながら

「さらぬ」 さあぬ 「さらバ」 さあバ約也

更字を書き加へば

因でマシ

「さららに」 更字也
今さら

是ハさらバさらハ別也

アララン
アラタム
アラタム

○ かなしこなき あなき かしこし

并、あなあれ 等れ 詞之勘辨

読字

ちかく集八

白雲此こなきかなしに立るれんをぬさとくくういぬのいせさ

斤糸をこなきかなしにうけけるあはれよこしんしす

冬あけりやより名れちりけはるのあな法系ぬやふ

あけりて月乃か多し心もいあなきおもてをよこしんしす

右に
研究新定
ジテイ
雨程 然程
読者
以上俗ハ去字を和印
字を弟ハシカ約
サ也 さらハシカ也 さらハ
シカリハシカレ也
皆サマツム

満々云々
あなこつふ詞ハあのかゝり約つまりを字を宛あつまは彼方字也
中一能くバ彼トつふ字ハ則あのトつふ詞トてあの方トつふべきを
約つめてあなこつふなるべし依て

かかななここハ彼方 彼方ノ字意なるべし

又
ああの
てにをは、活用そんじきの付けべき詞ことばハ何なんれも所以ゆゑハ
彼トつふ字ハ宛あつまる亦またこれバ也

あれ
かれこれトつふ同おなじく俗言ぞんごトあれれ共ともいふこ
依てあれトつふ詞ことばハてにをは、活用そんじきの付けべき也

二つ共とも
彼トつふ字ハ
意いなるべし
。あれハんんなる。あれハそれと
。あれこそ大系也 此類也

扱あつかひああのトつふ詞ハあの方かたト下した畧りやくなりてああのトつふ詞ことば發あかせ
物をさして慥たしかトつふ詞ことばと成なるなるべし
但ただしああのトつふことばハ俗言ぞんごトて雅言がけんトハ有あるべし又
是こゝより轉うつりてあれトつふ詞ことばも出い来きたる者もの歟や是こゝ又俗言ぞんご
なるべし勿な論也

ああのトつふ文句ぶんこう少すく分ぶん集しゆ之し

- 。ああの紫むら垣かき乃の本もとに家いへヲを居ゐりてああ
- 。ああの松まつとこそハおとつらま
- 。ああの籬かきとこそハ松まつ法ほうト
- 。ああの松まつこそハ竹たけ平ひらト
- 。ああの松まつとこそハ竹たけ笛ふえト
- 。ああのほろりと夕ゆふ波なみト

かか
水の
ああのトつふ同おなじ
彼 又 夫つまの字あを宛あたり
又 慥たしかニ人ひとに宛あてて云い時とき 渠ちカレ
此こ字あを書かけり

○ あの浪乃何なるにぞ

○ あれはとてぬれ尾の寺 ○ あれはそれかどいへまにて

○ あれはとてぬれ尾の寺 ○ あれはそれかどいへまにて

○ あれは共いを像也消ちんと ○ あれはまはほそくやハ

○ あれはまはほそくやハ ○ あれはまはほそくやハ

○ あれはまはほそくやハ ○ あれはまはほそくやハ

○ 今熊野とあれぞか ○ あれこそあれ中山法興寺

○ あれこそあれ中山法興寺 ○ あれこそあれ中山法興寺

○ あれこそあれ中山法興寺 ○ あれこそあれ中山法興寺

○ あれこそあれ中山法興寺 ○ あれこそあれ中山法興寺

○ あらトイフ詞

あ

あ、歎息ノ音
らハ 助音也

故^タ唯^タあトの^ト言^フ意^ト

例^ニ 野らトイフが如^ク— ら、音に心無^ク

荒字を
借て假に
宛る也

○ 恙嬌—や、 あ、嬌—やト云云

○ 恙嬌—や、 あ、嬌—や

○ 恙思ひ嬌さけよと、 あ、思ひ嬌さけよト云意也

〇 だにトいふ詞

枕詞

古今集一

日 菟奴ととををどに残せ梅花を春一き時の思ひてまを

日 宮とのこつらごにあち枝梅をねいらにちれとら風のふらふら

日 花の色ハ旅子こめて見せいとをををどにぬをぬままはれ風

日 花の色ハ春にありて見せいとをををどにぬをぬままはれ風

日 命だにんまかふものあは何うこくれ乃かちあろめかろま

古今集并聴ニ云ク 去測翁著述ニ

だにトいふ詞也ト

但一満考云ク

〇 きのふだにこんとおあひ一はの園乃生園の森子秋ハあろり

〇 きくだにを記ちさと此漢べ 〇 今だにも秋のをを記漢たの浦

〇 我だに何ふは舞樂の 〇 それだにあらにまうて之矣

〇 かり此親子のなつだに 〇 三人一所子ありつるだに

是等此だにト云へト云てよく関ゆる候に云ん也

又

〇 さなきだに人心 〇 吊ふ事よさなきだに

〇 さなきだにあざねるま芭蕉乃女のきぬハうの色此

是等さなきだにト句ツクリたれ共余詞はあろり
齊ハハさろぬだにトこそ讀なまさなきだにトハ
和字に讀み無一

沈吟

○で^トいふはずして^ツ約^めする也

名^みお^おあ^あふ^ふ坂^さ乃^のさ^さ祢^ねづ^づく^く人^にま^まさ^され^れで^でくる^くよ^よも^もの^の終

- 関^せ戸^とさ^さぐ^ぐで^で千^ち里^りを^を
- あ^あう^うで^で別^べれ^れと^と我^わつ^つま^まの
- 月^げだ^だに^にす^すま^まで^で秋^あ風^{かぜ}乃^の
- う^うく^くび^びも^もや^やら^らで^で條^{じょう}原^{げん}の
- 名^なの^のう^うで^でハ^ハけ^けひ^ひま^まど^どき^きう^う
- 恐^{おそ}ま^ま結^{むす}む^むで
- な^なび^びき^きと^とや^やら^らで^で徒^たよ^よ
- 後^{のち}の^の世^よを^をま^まぐ^ぐで^で鬼^{おに}界^{かい}が

○こ^こハ 是^こハ^ハト^ト云^を約^{する}也

- こ^こい^いそ^そも^も
- こ^こハ^ハい^いう^うに^に
- こ^こハ^ハ愛^{あい}り^り
- こ^こハ^ハ子^こり^りん^んの^の

○そ^そも

そ^そも^もく^くラ^ラ下^げ田^{でん}各^{かく}一^{いつ}なる^{なる}也

- こ^こい^いそ^そも^も
- そ^そも^もさ^さし^しが^が
- そ^そも^も何^{なに}事^{こと}の
- そ^そも^もい^いん^んぢ^ぢ人^{ひと}ぞ
- そ^そも^もや^やい^いぢ^ぢる^る
- そ^そも^も是^この^の終^{つひ}の
- そ^そも^もは^はお^おと^と中^{ちゆう}は^は

そ^そも^もハ^ハ扱^{あつか}も^もト^ト云^をて^ても^も意^い通^{つう}ず^ずる^る也^也依^よて

こ^こい^いそ^そも^も何^{なに}と^と中^{ちゆう}ら^ら事^{こと}に^にて^てい^いぞ^ぞト^ト云^をつ^つを^を
是^こハ^ハ扱^{あつか}何^{なに}と^と中^{ちゆう}ら^ら事^{こと}に^にて^てい^いぞ^ぞト^トい^いひ^ひて^て因^{いん}ら^ら事^{こと}也

○よ^よも

あ^ある^るま^まど^どト^トい^いそ^そん^ん冠^{かん}辞^じ也

- た^たぐ^ぐよ^よの^のつ^つま^まに^によ^よも^もあ^あり^りト
- よ^よも^もさ^さハ^ハあ^あり^りト
- 和^わ之^のの^の親^{おや}ハ^ハよ^よも^もく^くら^らか^かじ^じ
- よ^よも^もハ^ハ命^{いのち}ハ^ハい^いぢ^ぢき^き

「あ^ある^るま^まど^どト^トい^いそ^そん^ん冠^{かん}辞^じ也」

〇そよ

それよ、中田君 歎

説字

五馬山の笹ら風ふけてそよ人をわかれやすふ

〇そよとのたよりもきこいで 〇そよは遠奥乃

〇たび給へ

賜ノ字也

たびモたむせモ因ド

〇たび給へ

たびハ 自身へたまハト云ヒ
賜 給
たまへハ 他へ對して云詞也

依て たび給へ ハ自他の二ツ也
たび給へ

〇そばをとりにト云詞

そばトハ 綾ノ字也

袴カ衣物の裾之事に大方いり 手に撮らんと
なまけまバ意分明也 〇そばトハ 側ノ字を書べき也 乱れ

〇江の津袴乃そばをとり 〇大口のそばを多くとり

〇ぬり袴のそばを多くとるんで 〇世にぬり衣乃そばをとり

〇袖うちそよひそそをとりトのこ云て袴の中にあせたり
云林院より

是等此文句によつて考ふに袴もあれ着付の衣物
ふてとぬり 都て裾の事をそばト云ぬるべし

下知のれに非ず俗言に志ほれる下知のれ也

○志ほれ

○志ほる

○志ほり

○志ほら

雨沾ノ字也

シホル、
又ル、

らりるれニ通フ

○旅の衣ハ篠掛乃高けき袖也志ほるん

○阿の紫垣の本に志ほり志ほれて入い

○別建此涙の雨乃袖志ほれぞ草衣

○実心なきほま衣さうでもぬらぬ我袖をかきねて志ほれと也

○綺羅衣の涉袖と志ほるむかひにんしほふ

ぬらせと也意
又絞を兼り

○不覚の涙は袖を志ほるぞ恥し記

絞を兼り

○千鳥の夢も我袖と涙は志ほる破枕

○のほりぞられ旅衣袖を志ほりて村面乃

○そや時面ぞ旅衣志ほる袖の身は糸を志のびくふ

○分ゆく末ハ記の路ぞ汐浜の浦をさしてきて津の涙乃おほ

程志ほりし旅衣

は志ほりを水子替てんが文意あきか也

○志のぶに堪ぬるは志ほるをさびた折しもおもひの病と

○ 涙の流るる玉
かづかざり
花もさへく

ちりぐにんの花とさほくく^三さほく^二袖のまきまでも

はさほく^ハ花のさほく^ハる梅のまき又さほく^ハるにぬれて
袖がさほく^ハれ成^ハる梅のまきさへ

○ 因^レで云^レ芦刈^ハ謡^ハさほく^ハた^レ我身の方^ハつれなくて^トあり
是も右のまきと同^レドかえき^ハ歟 但^レはさほく^ハる^ト云^レ詞^ハは
別^ニ子^ニ趣^ニ意^ニあり^ト古^レ書^ニに^ハさほく^ハれ^トて^ハなく^ト事^ハある^ハは
也^ハ往^テて^ハ乱^レる^ハべ^シ

○ か^ハふ^レ涙^ハの^レ雨^ハと^ハれ^ハさ^ハほ^クる^ハ袖^ハの^レ花^ハさ^ハき^ハほ^ハ出^レる^ハま^ハき^ハ云^ハは
さ^ハふ^ハも^ハなく^ハば^ハり^ハなる^ハ

次^ニ上^ニ千^ニ手^ニ此^ニ文^ニ句^ニと^ハ同^レく^ハ雨^ハさ^ハぬ^レて^ハ袖^ハの^レさ^ハほ^クる^ハれ^ハなり
た^ハると^ハ花^ハの^レさ^ハほ^クる^ハる^ハま^ハき^ハを^ハ兼^テて^ハ云^ハる^ハ文^ニ句^ニ也

○ 降^ハい^ハま^ハる^ハる^ハ涙^ハか^ハと^ハ袖^ハうち^ハ拂^ハひ^ハ裾^ハを^ハり^ハさ^ハほ^ク

さ^ハぐ^ハくと^ハた^ハど^ハり^ハく^ハも^ハ迷^ハひ^ハゆ^ク 衣^ハも^ハ心^ハも^ハさ^ハほ^クる^ハれ^ハ成^レる^ハなり

○ 風^ハも^ハよ^ハぎ^ハて^ハぬ^ハき^ハ水^ハも^ハ氣^ハを^ハ濁^ハさ^ハぬ^レと^ハ袂^ハを^ハひ^ハく^ハ衣^ハを^ハ
さ^ハほ^クる^ハか^ハして 是^ハも^ハさ^ハほ^クる^ハる^ハ中^ニ分^レる^ハ

又

○ 大^ニ佛^ニ供^ニ養^ニ さ^ハほ^クる^ハる^ハ森^ハ乃^ハる^ハ面^ハ涙^ハの^レ梢^ハも^ハぬ^ハれ^ハ我^ハ袖^ハも^ハさ^ハほ^クる^ハか^ハなる

涙^ハさ^ハほ^ク

ト^ハあり^ハば^ハ文^ニ句^ニま^ハ何^ニ共^ニ解^ニる^ハ難^シ

解^レ難^シ

満^テ云^フ

さ^ハほ^クる^ハる^ハに^ハ如^クき^ハら^ハ合^テ

梢^ハを^ハぬ^ハれ^ハ我^ハ袖^ハも^ハさ^ハほ^クる^ハか^ハなり^トは^ハ涙^ハさ^ハほ^クる^ハ云^ハな^ハる^ハが^ハい^ハ
分^レり^ハせ^ハる^ハか^ハなる^ハ思^ハふ^ハ

悄セウ
あはれ
慈ヒテ

雨アメ ぬれを あはれ
麻衣の音々を 只て 後の
白きよし

甘カン 葉エハ 葉の傷む
ば傷キ

又

○ 志ほる

甘女ノ字也

新撰万葉

之折

甘女也トアリ
松バを、假字ヲ
書きまよ

沈吟

古今集五

吹かすに跡へ乃草木はほるいふ風をありといふん

文房康秀

古今集序

志ほめる花の色あうて

- 又季夫人ハ紅色の花乃粧おと落て志ほる流れ床の上
- 一所ハ六浦のう風山風吹志ほりくちるゆみちをふ乃
- 梢乃ほり吹志ほり

又

○ 志をり

標折

一の書

葉ノ字ヲ志をりトヨセリ

沈吟

吉野山古乃志をり此をかてまぶらんぬ花のおく成るも

- 志をり志をりを志をるそ奥も迷ふ
- 手折 標折
- そことも志をるぬ雲雀山乃草木をこけて谷底の
- 志をり成道よひ一曳乃

又

○ 志をり

又

- 猶志ほりつる人心の板平如斯なり共是も志をりつるそハ
- なき歎 所以ハ慕 尋る 文意を解也 往て乱る
- 志をりして花をかぎり此神をるを木の葉と人やんむ

は志をりして文意を共不解也 蓋し枝折也 意を解也 亦也 トイフ又

○ ちり方
又來方ヨシカタ也

以往ヨシカタ

- ゆえ之定めぬ道ちれハちり方もいつくちりま
- 世を控人の旅乃をちり方つくあるらん
- ちり方より今れをまても
- ちり方切ををかぶて かんがら約也
- 千世の古さたりちりゆえも君の志ぞと
- ちり方此の経もわら流て

○ 烏帽子折ノ謡ニ

○ みちの國乃守にらちるせ路をん 文

ちり集ヲ聴ニ云

こゝにも伊勢物語もみちれとかけらその時乃ちり言
ふてよりくは是ハ陸の奥乃國といふ其おくれおを省きて
みちのくれ國といふこみちのふとをいへまりに省きて誤り也

○ 鞍馬天狗ノ謡ニ

○ 會誓をすくがん内身と守るべし 文

是ハ會統旨の恥をよぐんと云がれながらぬ事を仕たさいひて
ニ文字多うして拍子調（まじり）ひ難きによて止事を得ず會統旨を
よぐんと斗ひて恥の事になせたる取返しは是も次より
いふ鳥帽子折のみらの國とト同トく省（しやう）きこて後世不存（しゆじ）
の人乃者ま心得遠ひ成もせんと心付をもの也

○ 花筐、謡のサシニ

○ かごトけな記の癖云ふしごと文
或云かごトけな記云ふを知らば作者こころより箱（はこ）ト

今是を答ていしく箱トたる人こそかごトけな記ト云意を
とらぬまれば乃文句此かごトけな記ト云ハ思まおほくも
いふ意より即是我國の言ふれならいせなるもの
風俗 ともや

○ 忠度、謡

附（つ）ケリ 愚ト踈ト兩字異ナル 訣

○ ほまりに愚（おろ）きは僧のいひなり也 文

文句意を熟考ふるに此傍中し愚（おろ）なる余あはれいかんをわが
老人が山方へ行（やまがた）まゐてと賤（しやん）をましゆをを問たまは老人言

は浦の海人をいひいひる子付海人多るば浦まに任べれ山
 方へり人ちまば山人とそいそめト外とがめたまむ人か
 そも海士の汲志ほをバ焼ぞしそ信をいさかトばり
 若一と信が印堂にさこりて相ハ志ほを焼ん為子新を
 とりに山へりものまるとおして実と是ハ理ありといひるを
 以て考ふまば信申し理教明なる人也然るをむ人があまに
 悪多お傍の心流成トいひハ道理よ叶は志かのこまら
 眼前に世傍を謙了輕蔑けべつまにあらば也

正シヨ
 走シル
 走トシ
 走ハヤシ

踈シヨ
 アヤドル
 ウトシ
 シロカ

踈シヨ
 ヒロシ
 ウトシ
 トラス
 シロカ
 カガフ
 コチリ
 シサム

踈シヨ
 ウトシ
 シロカ
 アラシ

文

はお誨りト云云まハ愚まてハ無一 踈字まお誨る又は
 ト云意也相ナツの文句意老人がいそく我らハつ祿ぐ立侍
 吊いハにお傍ハ人をたれる身そ何り何り何り何り
 結まぬおもおるそ何り何り何り何り何り何り何り
 云まハ相を理多難顔也そゆまハ花軒が忠度乃
 志多一也といふやハ人をそ知て何り何り何り何り何り
 信が何りて忠度の志多一也といふやハ人をそ知て何り何り
 結まぬお誨る何り何り何り何り何り何り何り何り何り
 忠度が志多一也といふやハ人をそ知て何り何り何り何り
 のり何り何り何り何り何り何り何り何り何り何り何り
 回向をいへり是さもむき道理也

は浦の海人をいひいひる子付海人ちるば浦まに住むれ山
方へり人ちるば山人とそいそめト外とがめたき人をいそく
そも海士の汲志ほを焼ぞしそ信をいそかトばかり
苦へと信が印堂にさとりて扱志ほを焼ん為子新を
とりは山へりものちるとおして実と是ハ理ありといひるを
以て考ふまは信中と理教明ちる人也然るをむ人があまに
あまお信の心詮哉といひハ道理よ叶は志かのこちるに
眼前に世信を謙て輕蔑けいべつまにいふ也

又次下

。お詠りにまゝは旅人うね 文

はお詠りト云云まハ愚まてハ無一 疎しよ字まてお詠り又ハ
ト云意也扱ナツの文句意老人がいそく我らハつ祢ぐ立信
吊いハにお信ハ人をたれ身も所りあう何て吊い
結まぬおもおるそりあう人ク船といひる也さりちから世む人が
云まハ扱を理多難題也をゆゑハ花軒が忠度乃
志る也といひるハ人をいそく知て信るめ始て世所へ来り
信が何て忠度の志る也といひるを志る人ヤ然るを何と吊
結まぬお詠りあう人哉といひハ難題あり也次下におて
忠度が志るハ木まて也ト老人がいひにうてさ信が忠職分
のりあまハ礼教を法のあまきて花のうてなまはし人
回向をしつり是さもあまき道理也

右の江の老人が云ふに、理を辨頭をみぐるといふ
事と解釈は多し。

たごころり書がご

源もと程ほど云い語ことばのまじりをしば理屈くつをいふべにあらず道みち理りのあかりもち所ところちれハ糸説せつをかからぬ

不ふ理り屈くつをいふなはば多おほくし毎ま満みちぢのあらず

たたんちうまれとすそあらせにさらにはならず
はなげは 氣き質しつ

竹たけ風かぜ如ごと麻あし ちよ竹たけのおとにぞ袖をかづきうるぬれぬまにその風とちりけき 基もと長なが卿きやう

被ひ

カフムル 俗言ニカフルト云
カツク ラレ
ラル

- かづけるきぬハもみぢがさね
- 狩衣の袂を冠のナドにうちかづき

潜せん

ヒソカ シクル 水ヲ
ヒソム カツク
潜行ナド、書ナリ
ヒソカニユク

- さんばは浦のかづき乃海人ヲいふ
- ちかく魚を追まらへかづきとせといふ
水ヲ追リテ魚ヲ追上置而シテ喰フナルニ

笄か

カツグ ニナフ 尺
カツゲル
天あま秤はかり棒ぼうニテ有あリカツグ類也

- 糸度も長刀おかついで

関東人ハ多分右ノ差別ニ因よキ故ゆ殊こと更さら記し之の者も也
上方邊ニテハカメゲルト云テカツグト云事ハ希也

北きた何なにニナフ事ことをかつぐト云 擔かノ字

擔か頭あたまの柴ハ不香かほの花とも折おつ

都て謡本に「浪」書たる人多分誤也
燒時又燒とる以て「浪」とハ書なれ

出「海」 入「海」 「川」 「海」 「川」 「海」 「川」
「海」 「海」 「海」 「海」 「海」 「海」 「海」
「海」 「海」 「海」 「海」 「海」 「海」 「海」

又 右何事も 潮 汝 此二の内を
書べ

「浪」竈 「浪」煙 「浪」木 「浪」草 「浪」燒 「浪」屋
「浪」や海人 「浪」やき衣

右筆字ハ 浪と書べき也 鹽 エンアン正

左巻十八雜書下 己方「浪」字人「浪」ハ浪磨の浦浪磨も「浪」は「浪」つ「浪」となるよ

又 潮 親子此ちぎり 潮乃 ニニツト

汝 〇いとまを「浪」乃 ニニツト
〇沖子を「浪」と「浪」を「浪」をけ ニニツト

右此如く書分て然るべし 〇よはる浪も「浪」ゆるハ「浪」もさしやん ニニツト

かゝる

掛係懸斯 カキテ 蒐 コニヒ

かゝり
かくて

かゝる、か斯スある、ス約ヨク
かゝりける、か斯スありける、ス約ヨク也

〇 かゝるためにもむねの

〇 かゝる亦子位居して

〇 かゝる美人乃

〇 かゝるべきとあゆみゆく

〇 かゝりける所尔

〇 かゝりあしと極キョク也

かくありあしと云々なる也

〇 かくてともちいふゆり

〇 かくて清前をまじり

〇 かくて阿多き事あり

〇 かくていきて下海にめ

〇 ナハ也

是也ト云を約てナハト云也

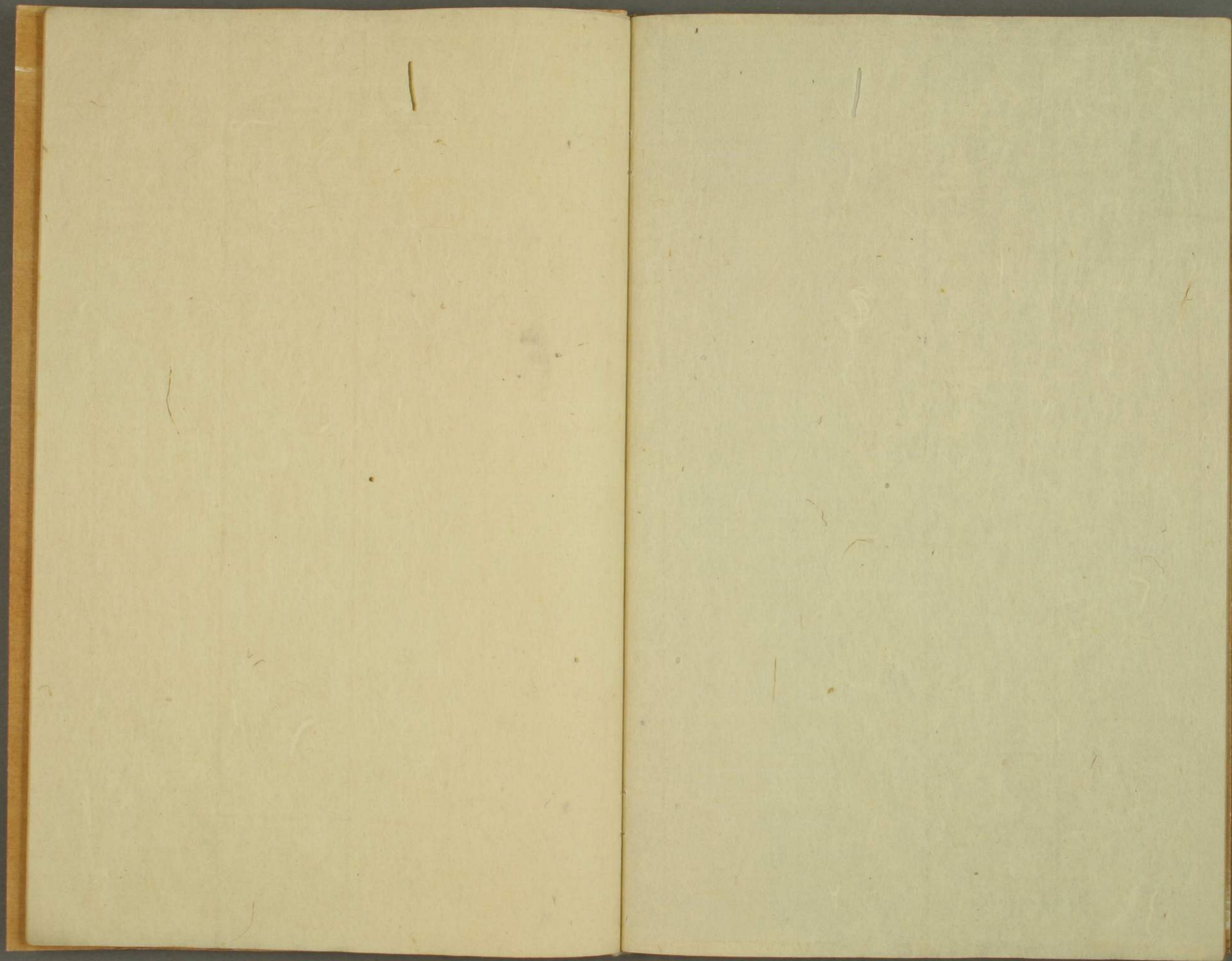
〇 ナハ也部族の紐波津子

〇 津の玉乃ナハ也日本にありあき津路の

右ナハく是也ヲ約てナハト云そのナハトに付て名一所のナハ也
北池ヲ兼て和子讀する也

〇 いなほ糸を分て月を布なる昆陽の池

いなほ糸也折 号地名也



以下全て

白紙

